【パネル報告６】

# 多文化共生をめざす教育実践の創造と博物館

## ――ナショナリズム言説の相対化とマジョリティの特権性の脱構築にむけて――

森茂　岳雄

### はじめに

1990 年代以降の日本社会の多文化化の急速な進展に対応して、総務省は『多文化共生の推進に関する研究会報告書―地域における多文化共生の推進にむけて』（2006 年）を公表した。それをもとに、各都道府県・指定都市外国人住民施策担当部局長宛に「地域における多文化共生推進プランについて」を通知し、多文化共生施策の 推進に関する指針・計画の策定を指示した。現在、それを受けて地方自治体において地域における多文化共生の推進に向けたプランづくりが行われ、順次実施に移されている。

教育の分野においても、「多文化（共生）教育」の名の下に、ニューカマー外国人児童生徒の適応指導や日本語学習支援を通しての学力保障、進路指導、不就学の子どもへの対応、母語・母文化維持への支援等々が行われてきている。このように今日「多文化共生」というスローガンは、日本語が不自由な外国人住民（児童生徒）へのコミュニケーション支援や生活支援等、異なる文化を持った人たちへの寛容の奨励を意味するマジョリティの日本人側のことばとして使用されている。しかし、ここではマジョリティである日本人とマイノリティである外国人の現実における不平等な関係は隠蔽され、マジョリティ自身の特権性の脱構築や意識変革については十分に論じられ、実践されてこなかった。

報告者は、以上のような問題意識に立って教育現場と連携して、マジョリティの日本人児童生徒の意識変革につながる教育実践を進めてきた。本論では、そのような多文化共生に向けた試みの中から博物館を活用した教育実践について報告する。博物館を活用した教育実践の取り組みについては、これまで国立民族学博物館や JICA 横浜海外移住資料館において展示理解に役立つ教材の開発や博物館を活用した国際理解（異文化理解）教育プログラムの開発研究を行い、学校と連携してさまざまな教育活動を行ってきた[1]。本論では、それらの活動の中から多文化共生に向けた教育の取り組みを取り上げ、その実践にむけた博物館の可能性と課題について報告する。

### 1　国立民族学博物館における実践

国立民族学博物館（以下、「民博」と略）では、2004 年に特別展「多みんぞくニホン―在日外国人のくらし[2]」を開催した。本展示は、進行する日本社会の「多文化化の実態を、できるかぎり個人としての外国人を通して知ることを第一目的とし、さらに共生の条件となる多様性への寛容の必要性を積極的に主張する[3]」ことを目的としたものであった。同館は、民族学・文化人類学の日本最大規模の展示面積と収蔵物を有する博物館であるが、これまで主に国外の「他者」にまなざしをむけてきた民族学・文化人類学が国内の「他者」にまなざしをむけ、「多文化共生」という現代社会の課題に積極的に取り組んだという意味で、最初の画期的な企画であったといえる[4]。本論では、同展示への見学や同展示に関する資料の活用を通して日本文化の多様性や在日外国人の基本的人権についての学習を展開し、生徒に多文化共生の意識を育んだ織田雪江（同志社中学校）の実践の意義について検討する。

織田は、民博の特別展「多みんぞくニホン―在日外国人のくらし」の開催の情報を聞き、2004 年度に

写真１　民博特別展「多みんぞくニホン」のポスター

担当することになっていた社会科地理的分野のカリキュラムに同展示を活用した新しい単元構成を試みた。その背景には、多文化化の進展する中で、「足下の日本社会を誰にとっても住みやすい公正な社会にするために、日本に住む多様な人々についても、もっと理解を深め、彼らの直面する問題や、それらが私たちの生活とつながっていることを知る必要性が、急速に増してきている[5]」という認識があった。

そのような問題意識に立って実践した単元「多みんぞくニホン」の概要は以下の通りである（この単元は、2005・2006 年度にも実践された）。

１．単元名：多みんぞくニホン
２．学年・教科：中学２年、社会科（地理的分野）
３．実施年度：2004 年度～2006 年度
４．単元目標：
①外国にルーツをもつことの楽しさに気づく。
②外国にルーツをもつことの大変さに気づき、その背景を知る。
③お互いの違いを認めて、尊重し合う社会をめざす取り組みを知り、参加にむけての態度を養う。
５．展開計画（2004 年度）
第１次（2 時間）：（導入）多みんぞくニホン
・民博特別展「多みんぞくニホン」のポスター（写真１参照）を資料にして、そこに写っている人々の顔や多言語の看板をヒントに、日本に暮らす多様な人々について知る。
第２次（5 時間）：多民族化への過程
・展示解説書である国立民族学博物館編（2004）『多みんぞくニホン―在日外国人のくらし』（財）千里文化財団、所収の解説文や写真を用いて在日コリアン、在日中国人、在日ブラジル人の順に日本の多民族化の過程について考える。
第３次（5 時間）；課題「多みんぞくニホン」の発表
・民博の特別展の見学やエスニックタウン等の現地調査をもとに、「多みんぞくニホン」を実際の社会の中に見つけて発表する。（テーマの決定→まとめ→ポスター発表）

以上、正規の授業の他、連動して「多みんぞくニホン」をつくる人々と出会える機会をつくろうと、週１回の学年礼拝に民博の特別展の作成にたずさわった在日外国人研究者他を呼んで、在日外国人としての自己の体験や民族の歴史的経験を聞く機会を設けるとともに、自主学習として民博の特別展示の見学や、関西地区のエスニックタウンへの現地調査を促した[6]。

本単元の学習後の生徒のレポートをいくつか紹介する。（下線部引用者）

・「生野のコリアを訪ねて」

ぼくは始め、コリアタウンに怖いイメージを持っていたけれど、着いてみるとのどかで気持ちがやわらぐようなほのぼのとした町並みでした。お店の人はとても親切で、ますます親しみがわき、帰る頃になるとこの町が好きになりました。ぼくが始めに持っていた偏見などがいつのまにか韓国への親しみにかわっていたので良かったです。僕も初めに怖いイメージがありましたが、ホームを下りてキムチのにおいをか

ぐと好奇心へと変わりました。この経験は僕を韓国に近づけてくれたと思います。（2005年度男子、2人で共同発表）

・「朝鮮学校の教育」

最後にまとめてみると、日本に住んでいる以上、日本文化や日本社会に関することを学び、日本と朝鮮の両国を意識して学習していることがわかりました。どの民族もどの国に住んでいようと、自分の国の言葉と文化を学ぶ権利はあると思います。異文化を理解することは口で言うほど簡単ではありませんが、今や日本でも他国からの人が多く住んでいる時代になっているので、お互いの人格やアイデンティティを大事にしながら一緒に生きることが重要だと思います。（2006年度男子）

下線部の記述から、本単元の学習を通して生徒の中に多文化共生の意識がめばえていることがわかる。このような意識形成を促した背景には、現地調査や学年礼拝における人との出会い、博物館におけるモノ（展示）との出会いが大きく影響していると考えられる。

織田自身も、本実践を振り返って「特別展の開催が、多文化共生という現代的テーマを授業の中に持ち込むことを後押しし、生徒たちは、この展示から直接発表につなげたり、ここから実際の社会の中に学びの場を求めて現地調査に出かけることができた。そして、多様な文化を背景に持った人々と出会って自分が変化したり、公正とはいえない社会の現実に目を開かれることもあった[7]。」と述べている。ここでいう「公正な社会の現実に目を開かれる」経験は、まさにマジョリティである日本人の特権性への気づきである。

織田は、3年間の本単元の実践をさらに発展させて、マジョリティの日本人の特権性の脱構築をより意識した、在日外国人の在日資格や権利回復の歴史、難民問題を含んだ改訂単元を提案している[8]。

## 2　海外移住資料館における実践

2002年に横浜にオープンしたJICA横浜海外移住資料館（以下、「海外移住資料館」と略）は、日本の海外移住の歴史および移住者と日系人の現在の姿をテーマにした博物館である。展示では、JICAが戦後主に中南米への移住事業の一翼を担ったことから、中南米とそれに先行するハワイを含む北米を展示の対象にしている。同資料館では、日系移民に関する資料の収集、保存、展示、研究の他、「移住者たちの足跡や役割について多くの人々に伝え、理解を深めてもらいとくに若い世代の人々に地球市民として、一人ひとりが移住者からのメッセージを受け止めていただきたいとの思いから[9]」教育活動についても力を入れて取り組んできている。報告者は、移民についての学び（移民学習）が多文化共生の資質を育成する上で有効であるとの考えから、同館や学校で活用できる教材（カルタ、紙芝居等）や、学習活動案を含む指導者用の「学習活動の手引き」等、学習プログラムの開発に当たってきた。本論では、同資料館の教育活動について検討を通して、同資料館における多文化共生に向けた教育の可能性と課題について検討する。

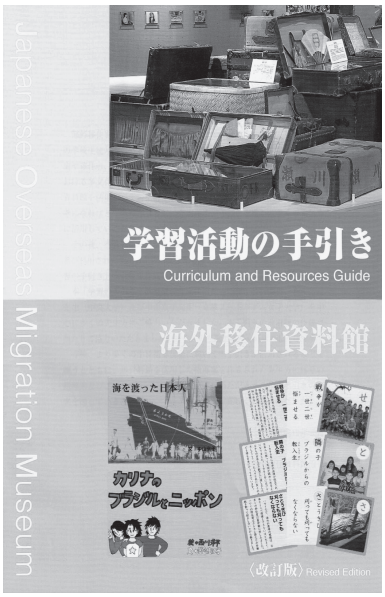


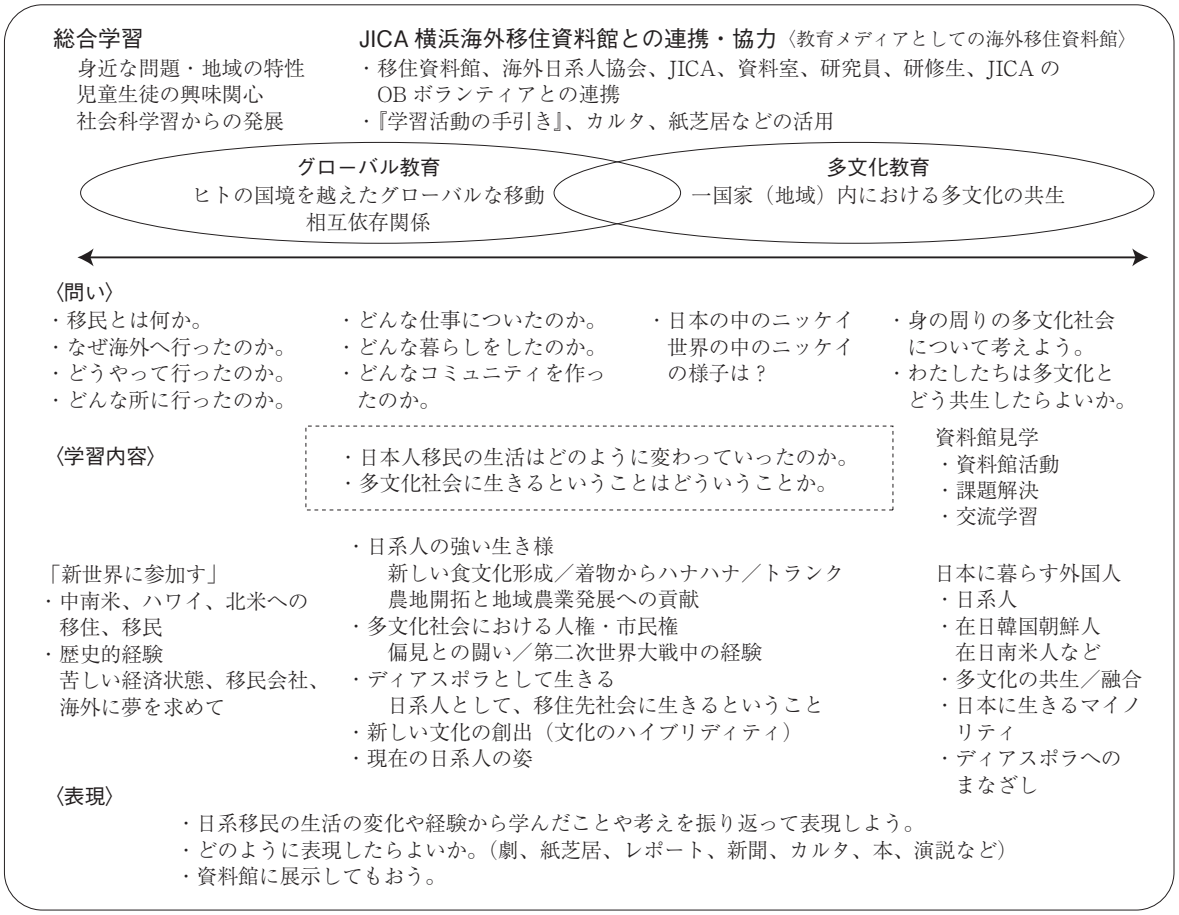
写真２　海外移住資料館「学習活動の手引き」

同資料館がテーマとする「移住／移民」という社会事象は、必ずしも児童生徒にとって身近で興味関心のある事象とはいいがたい。しかし、近代以降、多くの日本人が海外に移民した事実、彼らとその子孫の歴史的経験や現在の生活から、国民国家における基本的人権や市民権の問題、多文化社会における

エスニック・アイデンティティの保持、異文化接触による文化変容の様相など、「多文化共生」をめぐるさまざまな問題について学ぶことができる。また逆に、日本に移民した外国人の歴史的歩みや、近年さまざまな目的で来日している移民の現状や諸問題について、日本人移民や日系人の歴史的経験に重ね合わせて共感的に学ぶことは、これからの多文化共生社会を生きる子どもたちばかりではなく、われわれ日本人一人ひとりにとっても「共生」に向けての資質を養う上で意義がある。

このように、「移民」は、人の国境を超えたグローバルな移動や国家間の相互関係と、一国（一地域）内における多文化の共生をつなげて考えることができる格好の学習テーマである。これまで前者を考える教育としてグローバル教育が、後者を考える教育として多文化教育がその役割を担ってきたが、移民についての学習は、その両者をつなげて構想・実践できる可能性を有している。そこで報告者らは、海外移住資料館を活用して、このようなグローバル教育と多文化教育をつなぐ以下のような学習構想を考えた（図１）[10]。図中の〈問い〉（学習課題）と〈学習内容〉は、同資料館の展示のテーマと連動して構想されたものである。

図１　海外移住資料館を活用した学習構想




（出典：森茂岳雄・中山京子編、2006 年、42 頁。）

この学習構想図にあげた〈学習内容〉からもわかるように、日本人移民や日系人の歴史的経験、彼らの移民先における生き様や現在のくらしについて学ぶとともに、日本国内にも目を向け、逆に日本に移民してきた外国人のくらしや彼らが直面している現状や課題の学習を通して身近な多文化との共生について考える学習構造になっている。

前述したように、移民学習を実践するにあたって考慮しなければならないことの一つは、児童生徒に

とって身近でない「移民」という抽象的な事象にどのように興味や関心を向けさせるかということである。そこで、展示と児童生徒を結びつける媒介物（教材）が重要になる。そのような課題意識に立って、報告者らは抽象的な事象を可視化したり、実際に操作できる学習教材として移民カルタや紙芝居、それらを含むアウトリーチ教材（ニッケイ移民トランク）の開発を行い、それらを活用した学習活動案例[11]を作成、実践してきた。

これらの教材は、可視化や操作性という観点からだけではなく、カルタであれば読み札を読む、絵札の裏の解説を読む、紙芝居であればストーリーを読む、聞くといった可視化されたものを言語化すること、すなわち言語活動の充実によって事象に対する認識が深まることも特徴である。特に紙芝居がもつ物語性は、統計資料や文書資料の読み取りとは違って話しの展開を追いながら自然に移民という事象に迫ることができる教材である。さらに教材としてのカルタや紙芝居は、基本的には一人で使用するものではなく、集団との関わりの中で使用するものである。その集団の中には、日本人児童生徒の集団だけではなく、外国人児童生徒を含む集団も含まれる。その意味で、カルタや紙芝居は、児童生徒の共生の人間関係づくりという点においても有効な教材であるといえる[12]。

またカルタ教材については、以上の開発と実践の経験を踏まえ、多文化共生をより意識した「日本―ブラジル移民カルタ」の開発にも取り組んだ。本カルタは、日本人ブラジル移民、日系ブラジル人に焦点を当て、彼らの歴史・文化学習と日系ブラジル人への継承日本語教育を兼ね、日本人学習者も共に学べることを意図したものである[13]。

## 3　博物館を活用した教育実践の課題―「多文化共生」を実質化するために

博物館を教育利用する場合の大きな課題の一つは、学習者の認識に大きな影響を与える展示表象をどう相対化し、戦略的に活用するかである。この点を考える上で、タイ・エイカが民博の「多みんぞくニホン」展の多文化主義に対して行った批判は示唆的である。

タイは、「教育領域や地域行政において現在進行中の『多文化共生』言説や実践は、基本的には『単一民族主義の神話』のそれとかわらぬ問題を包含していると私は考えている。『日本人』という主流の『民族』の特権性が問われることなく、また『白人』と『アジア人』との関係性において『日本人』が再生産されているという意味において、この２つの言説／実践は共通しているのだ。展示における『多文化主義』も、こうした問題を乗り越えてはいなかったと思われる[14]」と述べている。

具体的には、第一に博物館が生産するナショナリズムの問題である。「多みんぞくニホン」展が「外国人」に焦点を当てることによって、民族的に多様な「外国人」が日本に存在するという意味になってしまい、アイヌや沖縄をめぐる日本の内部にある文化的、民族的多様性が忘れられ、結果として「単一民族国家」という神話が温存されてしまったというのである。だとすると、「博物館の教育的機能を通し、訪問者は『外国人』のくらしを学びながら、（「単一民族国家」という）ナショナリズム言説を再習得してしまったことになる。」（括弧内引用者）[15]この点は、海外移住資料館の展示でも視点は違うが、同様のことがいえる。すなわち、同館が展示する移住先の対象は、ハワイ及びアメリカスであり、かつて植民地であった朝鮮半島、中国大陸、東南アジアへの移民（植民）については展示されていない。また展示テーマ「われら新世界に参加する」に示されているように、同資料館の展示は、日本人が「移民先国で新たな社会と文明づくりに参加し、よき市民として確固たる地位を築き、地域の社会、経済、文化の発展に大きく貢献した[16]」というナショナリズム言説を基調に構成されている。多文化共生の授業づくりに当たっては、このような博物館展示の持つナショナリズム言説[17]をいかに相対化するかが課題である。

第二に、展示が暗に示す「日本人」の特権性の問題である。「多みんぞくニホン」展では、展示されていた「外国人」は、アジア系の人々が主流で、西欧系や北米系の「白人」がほとんど不在であった。す

なわち、「多みんぞくニホン」に「白人」ははいらないのである。同様に本展示においては、「日本人」もまた不在であった。本展示における「『日本人』の不在は、他のアジア系のミンゾクに対する『日本人』の特権的地位を認めたことを示唆しかねない。『白人』は『ニホン』において特権化されているのなら、『日本人』は『多みんぞく』に対して特権化されている[18]」のである。多文化共生の授業づくりに当たっては、この日本人の特権性を脱構築するような実践が求められる。この意味で、前述した織田実践は、展示から出発して日本人の特権性の脱構築を志向した実践として評価できる。

最後に、リリアン・テルミ・ハタノが言うように、「『多文化共生』という言葉はマイノリティ、または社会的に弱い立場に置かれている人たちの側から発生した言葉ではない[19]」。この言葉を、マジョリティ、マイノリティが共に共有する言葉にしていくためには、以上の二つの課題の克服が多文化共生をめざす教育実践に課されている。

註

1――国立民族学博物館を活用した教育プログラムの開発と実践については、森茂岳雄編（2005）『国立民族学博物館を活用した異文化理解教育のプログラム開発』（国立民族学博物館調査報告 56）、及び中牧弘允・森茂岳雄・多田孝志編『学校と博物館でつくる国際理解教育―新しい学びをデザインする―』明石書店、参照。また、JICA 横浜海外移住資料館を活用した教育プログラムの開発と実践については、森茂岳雄・中山京子（2006）「海外移住資料館を活用した国際理解教育の授業づくり―教師研修を通してみた移民学習の可能性―」JICA 横浜海外移住資料館『研究紀要・館報』1、35-59 頁、参照。

2――本特別展は、2004 年 3 月 25 日から同年 6 月 15 日まで開催された。

3――庄司博史（2004）「いずれ、おとずれる共生社会のために―多民族化の息吹をつたえる―」国立民族学博物館編『多みんぞくニホン―在日外国人のくらし―』（財）千里文化財団、5 頁。

4――「多文化共生」をめざした教育実践における文化人類学の役割については、森茂岳雄（2009）「多文化教育のカリキュラム開発と文化人類学―学校における多文化共生の実践にむけて―」日本文化人類学会編『文化人類学』74 巻 1 号、96-115 頁参照。

5――織田雪江（2006）「国立民族学博物館特別展『多みんぞくニホン』を教育現場に生かす」庄司博史・金美善編『多民族日本のみせかた―特別展「多みんぞくニホン」をめぐって』（国立民族学博物館調査報告 64）、233 頁。

6――2004 年度に、民博見学を含む現地調査をした生徒数は下記の通りである。民博 70 人、南京町（神戸）28 人、コリアンタウン（鶴橋）14 人、その他 31 人。

7――織田雪江（2009）「『多みんぞくニホン』―社会科の授業に生かす」中牧弘允・森茂岳雄・多田孝志編前掲書、明石書店、164 頁。

8――織田雪江（2012）「『多みんぞくニホン』を生きる」開発教育研究会編『身近なことから世界と私を考える授業（Ⅱ）―オキナワ・多ミンゾクニホン・核と温暖化』明石書店、49～109 頁。

9――海外移住資料館編（2004）『海外移住資料館展示案内―我ら新世界に参加する』国際協力機構横浜センター、はじめに。

10――森茂岳雄・中山京子（2008）「授業づくりにおける海外移住資料館の活用と教材開発」森茂岳雄・中山京子編『日系移民学習の理論と実践―グローバッル教育と多文化教育をつなぐ』明石書店、323 頁。

11――JICA 横浜海外移住資料館編（2007）『学習活動の手引き〈改訂版〉』国際協力機構横浜国際センター海外移住資料館。

12――森茂岳雄・中山京子、前掲論文（2008）、329 頁。

13――森茂岳雄・中山京子・福山文子（2013）「日系移民学習の教材開発と実践（I）―移民学習教材としての「日本・ ブラジル移民カルタ」の開発」海外移住資料館『研究紀要』第 7 号、43～61 頁。

14――タイ・エイカ（2006）「『多みんぞくニホン―在日外国人のくらし』における多文化主義の課題」庄司博史・金美善編、前掲書、254 頁。

15――同上、255 頁。

16――海外移住資料館編（2004）、前掲書、はじめに。

17――全米日系人博物館の展示がもつナショナリズム言説については、以下の論文を参照のこと。Fujitani, Takashi（1997）“National Narratives and Minority Politics: The Japanese American National Museum’s War Stories.” *Museum Anthropology* 21（1）: pp.99-112. 森茂岳雄（2008）「日系アメリカ人をめぐる展示表象の多文化ポリティクス―強制収容、ミックスプレート、Hapa」三浦信孝・松本悠子編『グローバル化と文化の横断』中央大学出版部、341-360 頁。

18――タイ・エイカ（2006）、前掲論文、257 頁。

19――リリアン・テルミ・ハタノ（2011）「在日ブラジル人を取り巻く『多文化共生』の諸問題」上田晃次・山下仁編『〔新装版〕「共生」の内実―批判的社会言語学からの問いかけ』三元社、55 頁。